

### 第3問

次の文章は『玉水物語』の一節である。高柳の宰相には十四、五歳になる美しい姫君がいた。本文は、花園に遊ぶ姫君とその乳母子の月汎を一匹の狐が目にしたところから始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

折節この花園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、「あな美しの御姿や。せめて時々もかかる御有様を、よそにても見奉らばや」と思ひて、木陰に立ち隠れて、(ア)しづ心なく思ひ奉りけるこそあさましけれ。姫君帰らせ給ひぬれば、狐も、かくてあるべきことならずと思ひて、我が塚へぞ帰りける。つくづくと座禅して身の有様を観するに、「我、前<sup>古事記</sup>の世いかなる罪の報いにて、かかるけだものと生まれけむ。美しき人を見そめ奉りて、およばぬ恋路に身をやつし、(A)いたづらに消え失せなむこそうらめしけれ」とうち案じ、さめざめとうち泣きて臥し思ひけるほどに、よきに化けてこの姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、またうち返し思ふやう、「我、姫君に逢ひ奉らば、必ず御身いたづらになり給ひぬべし。父母の御嘆きといひ、世にたぐひなき御有様なるを、いたづらになし奉らむこと御いたはしく」、とやかくやと思ひ乱れて明かし暮らしけるほどに、餉食をも服せねば、身も疲れてぞ臥し暮らしける。もしや見<sup>ミミ</sup>奉るとかの花園によろぼひ出づれば、人に見られ、あるは飛碟を負ひ、あるは神頭を射かけられ、いとど心を焦がしけることあはれなれ。

なかなかに露霜とも消えやらぬ命、もの憂く思ひけるが、(イ)いかにして御そば近く参りて朝夕見奉り心を慰めばやと思ひめぐらして、ある在家<sup>(注2)</sup>のものに、男ばかりあまたありて女子を持たで、多き子どもの中にひとり女ならましかばと朝夕嘆くをたよりにて、年十四、五の容貌あざやかなる女に化けて、かの家に行き、「我は西の京の辺にありし者なり。無縁の身となり、頼む方なきままに、足にまかせてこれまで迷ひ出でぬれど、行くべき方もおぼえねば頼み奉らむ」と言ふ。主の女房うち見て、「いたはしや。徒人ならぬ御姿にて、いかにしてこれまで迷ひ出でけむ。同じくは我を親と思ひ給へ。男はあまた候へども女子を持たねば、朝夕欲しきに」と言ふ。「さやうのことこそ嬉しけれ。いづこを指して行くべき方も侍らず」と言へば、なのめならず喜びていとほしみ置き奉る。いかにしてさもあらむ人に見せ奉らばやとことなみける。されど、(B)の娘、つやつやうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふゆゑ、「もし見給ふ君など候ばば、我に隠さず語り給へ」と慰めければ、「ゆめゆめさや

うの」とは待らず。裏身のめざましくおぼえてかく結ばれたるさまなれば、人に見ゆることなどは思ひもよらず。ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく、<sup>(注3)</sup>「待るなり」と言へば、「よき所へありつけ奉らばやとこそ常に申せども、さも思し召さば、ともかくも御心には違ひ候ふまじ。<sup>(注4)</sup>高柳殿の姫君こそ優にやさしくおはしませば、わらはが妹、この御所に御非上にて候へば、聞きてこそ申さめ。何事も心やすく、思されむことは語り給へ。違へ奉らじ」と言へば、いと嬉しと思ひたり。

かく語らふところに、かの者來たりければ、この由を語れば、「そのやうをこそ申さめ」とて、立ち帰り御乳母にうかがへば、「さらばただやがて参らせよ」とのたまふ。喜びてひきつくりひ参りぬ。見様、容貌、美しかりければ、姫君も喜ばせ給ひて、名をば玉水の前とつけ給ふ。何かにつけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御そばに朝夕なれ仕うまつり、御手水参らせ(注5)供御參らせ、月汎と同じく御衣の下に臥し、立ち去ることなく候ひける。御庭に犬など参りければ、この人、顔の色違ひ、身の毛一つ立ちになるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。「あまりけしからぬ物怖ぢかな」<sup>(ウ)</sup>この人の御おぼえのほどの御うちやましさよなど、かたはらにはねたむ人もあるべし。

かくて過ぎ行くほどに、五月半ばの頃、ことさら月も限なき夜、姫君、御簾の際近くおざらせ給ひて、うちながめ給ひけるに、ほとときすおとづれて過ぎければ、

ほとときす雲居のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水とりあへず、

深き思ひのたぐひなるらむ

やがて「わが心の内」とぐちぐち申しけば、「何事にがあらむ、心中こそゆかしけれ。恋とやらむか、また人に恨むる心などか。あやしくこそ」とて、

五月雨のほどは雲居のほとときす

誰(た)がおもひねの色をしるらむ

(注)

- |   |                           |
|---|---------------------------|
| 1 | 神頭—— <sup>やまと</sup> 鎌の一種。 |
| 2 | 在家——「」では民家の「」。            |
| 3 | 結ばれたるさま——気分がふさいで憂鬱なさま。    |
| 4 | 非上——貴人家などで働く女性。           |
| 5 | 供御——飲食物。                  |
| 6 | ぐぢぐぢ——ぼそぼそと。口もろいがむしゃらなさま。 |

問2 波線部 a ~ d の敬語は、それぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の① ~ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

⑤ ④ ③ ② ①  
a a a a a 狐  
姫 姫 姫 姫 君  
君 君 君

b b b b b 見給ふ君  
娘 娘 娘 見給ふ君  
君

c c c c c 娘  
娘 娘 娘 主の女房  
主の女房

d d d d d 玉水の前  
玉水の前 姫 姫 君 君  
君

誰にに対する敬意か

地文 a

もしや見奉ると

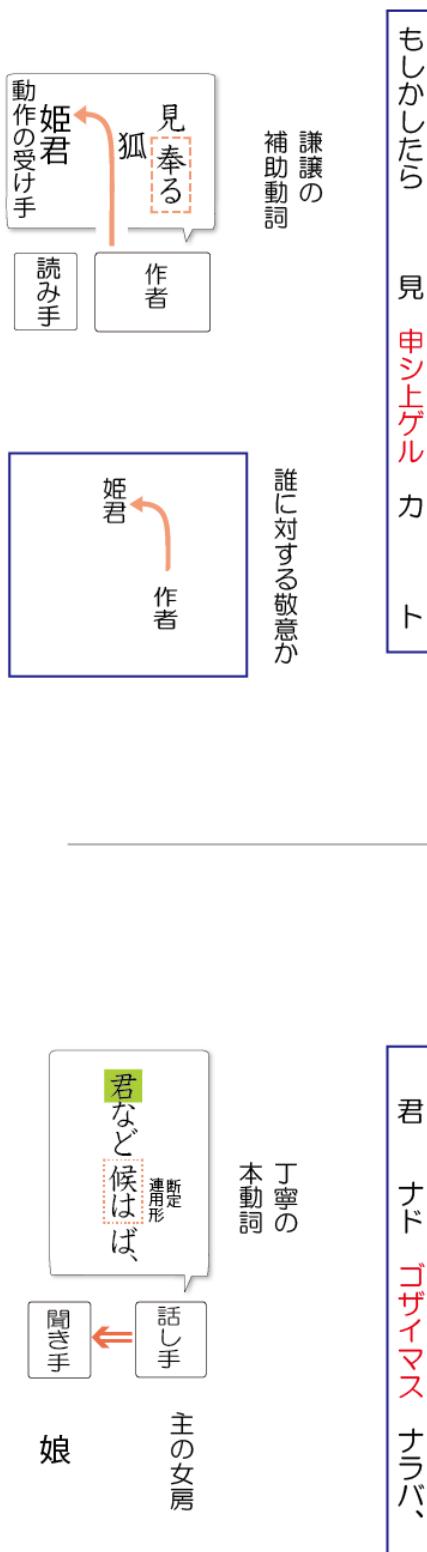
解答は

4

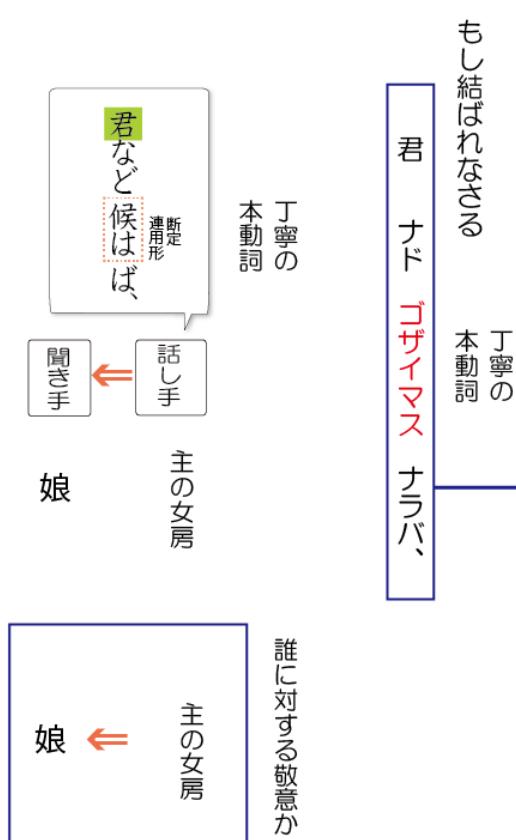
主の女房の会話

「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず」

b



52	見よ	見れ	見る	見る	見	見	もし
2	見よ	見れ	見る	見る	見	見	や
15	奉れ	奉れ	奉る	奉る	奉る	奉り	なむ
50	つかよへにとをのがりへにとをのがり						ぞ
							一

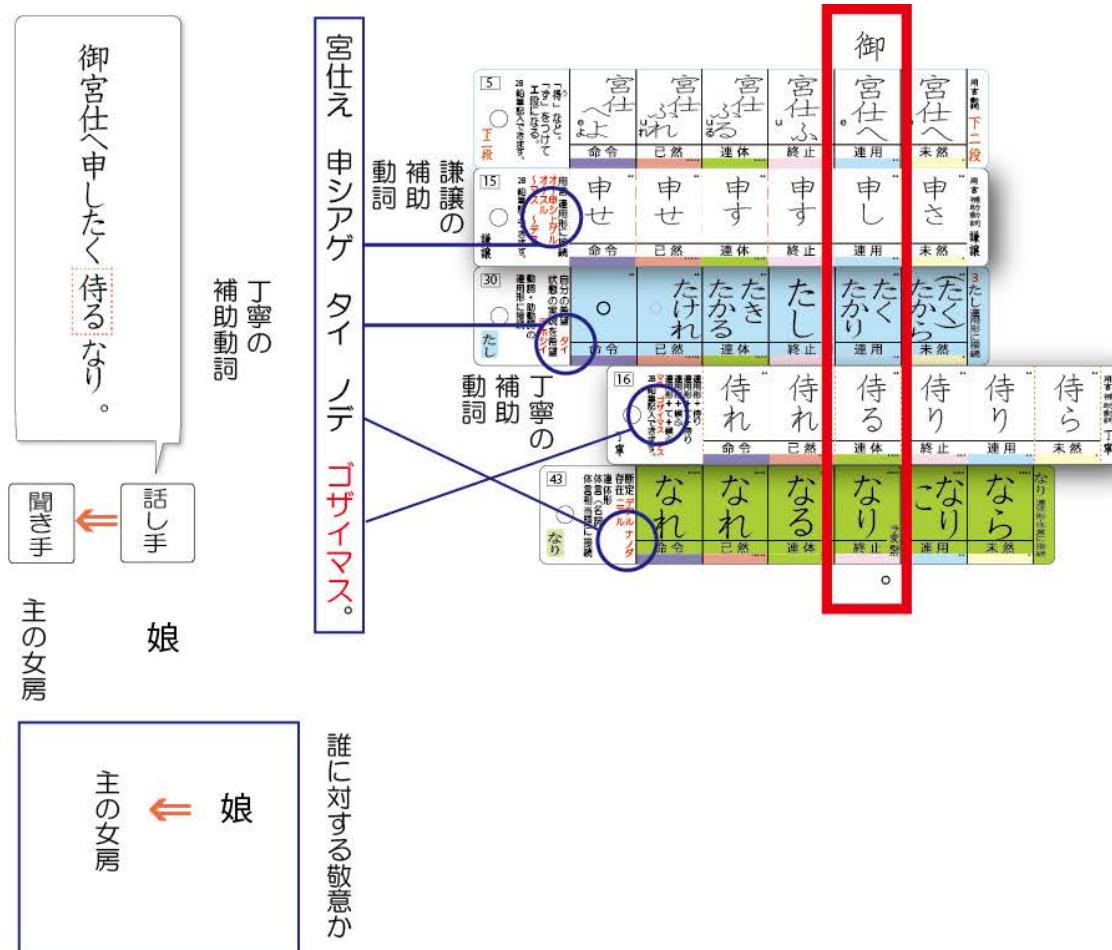


17	君	よやか	もがな	まじめ	しなど	
53	よやか	もがな	まじめ	まじめ	まじめ	
1	候へ	候へ	候ふ	候ひ	候は	
46	候へ	候へ	候ふ	候ひ	候は	
	命	已然	連体	終止	連用	未然

娘の会話

「……御宮仕へ申したく侍るなり。」

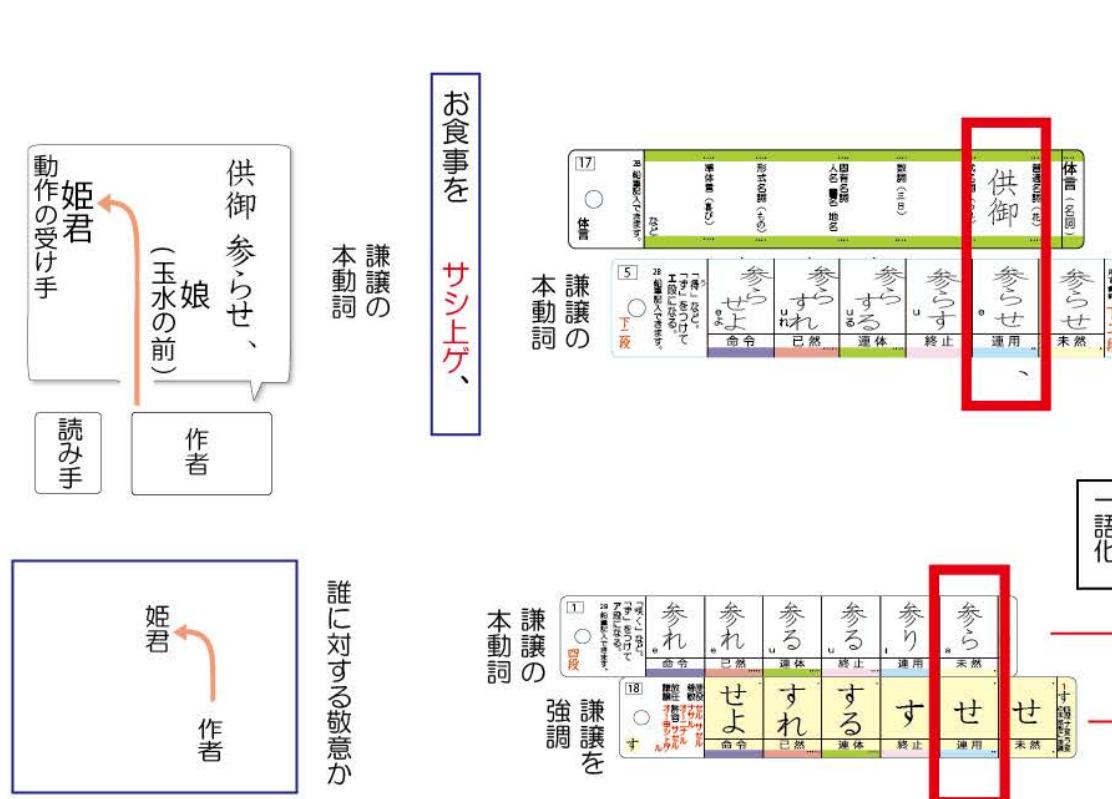
c



地の文  
d

供御参らせ、

A red arrow pointing to the left, indicating a direction or movement.



ならべてわかる『古典文法カード』で説明。お求めは→こちら